

じぶんの「こと」だけではなく

小学一年 井口 文乃

わたしはまいにちでんしゃにのって、ともだち六にんで学「う」にかよっています。

二学期がはじまってしばらくしたあるひ、げ「う」のとき、わたしはころんですねからちがでてしまいました。そのとき、ひとりのともだちがほけんしつにつれていってくれました。そして、ほかのともだちにまっであげようよといってくれました。それからその子は、そのひはならい「こ」があるのに、おかあさんにでんわをして、「ぶみのちゃん」がころんだのでかえりがおそくなる」といってくれました。

わたしはひとりでかえるのはまだ「わい」ので、その子のやさしいきもちにかんしゃしました。ならい「こ」にち「く」するかもしれないのに、おかあさんにそうだんしないで、じぶんでまっであげようときめたこともす「いな」とおもいました。わたしだったら、ならい「こ」にち「く」したらどうしようとおわててしまったかもしれません。

しんらんさまは、「じぶんだけがすくわれるのではなく、いのちあるものすべてがすくわれるみちをもとめられた」とえほんでよみました。みんながそんなやさしい子だったらみんなずっとなかよくい

られるとおもいます。

わたしは、しんらんさまのおしえとその子がしてくれたことをわすれないで、じぶんのことだけをかんがえるのではなく、ともだちのきもちをかんがえたり、こまっているともだちがいたらたすけてあげられる子になろうとおもいます。